

とっつておきぎの北方圏

ブルーベリーの森のなかで

北海道東海大学国際文化学部特任講師

橋本 弘美

—『フィンランド』—そう聞くだけで、国旗の鮮やかなブルーと白、そして深い森と湖の風景がぱっと広がり、胸がいっぱいになる。北欧の中でも、とりわけ「フィンランド」に殊更な思いを持っている人は多いと聞くが、私もその一人だ。

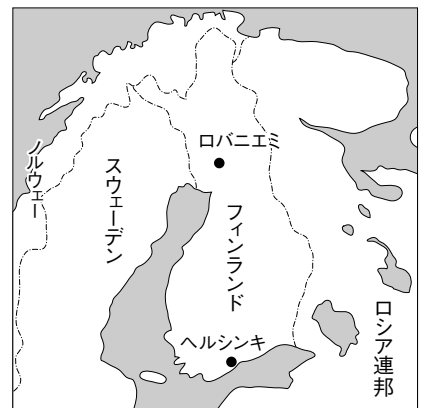
大学を卒業した翌年、私にとって初めての海外生活、初めての仕事、初めての一人暮らしをフィンランドのロバニエミという町で1年間過ごした。初めて訪れる未知の場所だったが、私の気持ちは「おじゃまします」ではなく、「ただいま」だった。全然知らない場所に行くのに、なぜかほっとするところに戻ってきた感覚だったのだ。なぜだろう？北海道に自然が似ているからだろうか？でも、それだけではない気がする。まるで呼ばれるようにして私は向かった。私を乗せた飛行機を、森は「おかえり！」と両手を広げて包み込むようにして迎えてくれた。

現地ではたくさんのお会いや発見があり、いろいろなことを考えた。目、耳、鼻、舌、皮膚の五感と感情すべてが全開の1年間だった。それらがきっかけとなり、いまの自分がいる。現在の興味関心も、仕事への情熱も、このフィンランドの経験があるからに他ならない。ここに私がフィンランドで感じた印象的な「とっつておきぎ」を記したい。

●マグカップ

フィンランドで生活するに当たって、欲しいものがあつた。それは、マグカップである。これから毎日使うものを、海外一人暮らしの記念として見つけたかった。到着してまだ日も浅いころ、私はカップを探しに町へ出た。小さい店やフリーマーケットをゆつくり散策し「カップと出会う」ことを楽しんだ。この町のどこかに、私と一緒に過ごすことになるカップがあると思うだけでワクワクした。どこでどんな風にあるだろう、それを想

「おかえり」と手を広げてくれた大好きなフィンランドの風景



像しながらお店を巡る。それはフィンランドで見つけた私の趣味の一つになった。

さて、数軒目のある小さなお店で、トナカイとサンタクロースの絵の入った、フィンランドらしいカップを見つけた。両手で包めるくらい大きい。これなら朝の一杯が二杯分も楽しめそうだ。

お会計のとき、嬉しくてお店の人に話しかけた。「これ：私のフィンランドでの最初の買い物なんです。すると相手も喜んで「そう！フィンランドでの最初の買い物？どこから来たの？」と話が弾んだ。最後に「美味しいコーヒーを！」とウインクしてくれた。

新しいカップを持ち、足取りも軽いその帰り道、偶然、前日に知り合った女性に会った。「ハイ！」と挨拶を交わしたあと、私は彼女にも「これ、フィンランドでの私の最初の買い物なの」と言って、道端でガサガサ包みを開けてみせた。すると彼女はとてつもなく素敵ね！と言ってくれた。自分が選んだものを「素敵」と言ってもらえたことが、また嬉しかった。

たった一個のマグカップは、使う前からもう色々なストーリーができた。この一連の出来事は、ほんの小さなことなのに、とても鮮明によみがえってくる。それは、何気ない会話の中にも、私の言うことを、それこそマグカップのようにきちんと受け止めてもらえたからだと思う。そんなやり取りは、もうコー

ヒーが入っているかのように、ほっと私を満たしてくれた。

●8歳の美意識

数日後、フィンランド人のリサと、8歳の息子ハンス君と知り合い、家に招待してもらった。ハンスは、全体は短い髪なのだが、髪の毛の後ろの一部分だけを長く残しており、それを三つ編みにしている。それは鉛筆の太さくらいで長さ30センチほど。つまり、後ろから見るとチョロンとした長い個性的なものがあるのだ。彼はそれをとてつもなく気に入っているらしく、「僕のしっぽなんだ！」と言って、誇らしげに首の後ろを見せてくれた。この個性的で不思議な髪形は「ハンスが決めたのよ。ここだけは切らないで、って言って」とリサが教えてくれた。

自分の「しっぽ」がちゃんと尊重されるところがとてもいいなと思った。それは、この「しっぽ」部分が伸びるまでの長い時間、ハンスの美意識も同様に守られてきたということとを意味している。「変だから切りなさい」と親が一方的に反対するのではなく、本人がいいと思っていることは、たとえ幼くてもきちんと聞いてもらえ尊重されている、という親と子の関係やあり方をとてもうらやましく感じた。

●親子の関係

ところで、△親子の関係Vでもう一つ、忘れられないエピソードがある。フィンランド滞在中に親しくなった男の子が、私をサマー



きのこを採るリサ



リサのベルの音を聞きながら、森の中へ

コテージに1週間ほど招待してくれるというのだ。海外の一人暮らしだったので、フィンランドの家庭生活を体験させてもらえるのは、とてもありがたい申し出だった。でもその彼は、私と同じ年であり、好意に甘えて彼の家に行かせてもらって大丈夫なのだろうかと思った。そこで彼に「お母さんは、どういう人なの？」と聞いてみると、その答えに私はとてもびっくりした。彼はこう言ったのだ。「彼女は本当に素晴らしい人だ。人の気持ちが変わり、やさしく、とても親切だ。困っている人を見ると放っておけない。ちょっと親切すぎるくらいだと思う。僕は今まで会った人の中で、彼女をとて信頼しているし、多くの人が彼女に信頼を寄せていることも知っている」私は、20代前半の男の子が、自分の母親をこのように表現することにも驚いた。それは日本で聞く、母親へのどんな言葉とも違っていた。とても客観的に、一人の人間を分析している言葉だった。マザコンという言葉がある日本の親子関係とは根本的に何かが大きく違っている気がした。

彼から聞いた通り、お母さんはとても温かく私を迎えてくれた。ある晩、私は彼の母親に息子をどう思っているかを聞いてみた。どんな答えが返ってくるか興味津々だった。それは次のようなものだった。「彼が生まれた日のことを今でもよく思い出すの。人生最大のプレゼントをもらったわ。天使そのものよ。大きくなってから、彼はたくましくかつこよ

く、本当に素晴らしい息子に成長したわ。正直で、優しく。絵を描く才能にも恵まれてそれを生かしている。私の誇りよ」

なんて素直な言葉なのだろう。成人した息子と母親とが、このような承認を互いに送り合える親子関係を築けるのは一体なぜなのだろう。それは、親が子供を「自分のもの」にしていないからではないか。つまり、親は子供がどんなに小さくても、一人の人格を持った人として認め、尊重し、接しているからではないかと思う。

●豊かな森の中で

ある日、リサは「今日はヒロミにフィンランドを体験してもらいましょう！」と言って私を森へ連れて行ってくれた。ベリーとキノコを摘むのだ。

上着と長靴を貸してもらい履き替えた。そして「熊が来ないようにこれもつけてね」と手渡されたのは、コロココロンと鳴る熊よけのベルだった。「エッ！熊がいるの？」とおののく私に、リサは「熊に、人間がここにいますよ、と知らせるの。みんなの森だから」と話した。「そうかあ、みんなの森かあ...」。フィンランドでは、森はすべて国民のもので、誰でも平等に権利が与えられていると聞いたが、そこには動物も仲間に入っているのかもしれない。それは人間が頂点にいるのではなく、あくまでも「森」という大自然を中心に、「人間」と「動物」の共存を伝える優しい言葉に思われた。コロココロンと鳴る音を

ブルーベリーとリンゴンベリー、こんなに採れました！（著者）



豊かな森の中で見つけたたくさんさんのベリーときのこ

聞きながら、リサの姿を見失わないように森に入った。

フィンランドの木々は、一本一本がとてもまっすぐで高い。そこはうつそうとした場所ではなく、見上げると空も見えた。上空から深緑や紺色に見えた森は、一步踏み入れると赤や紫のベリーやキノコがいたるところにあり、色彩あふれた場所だと知った。

天然のブルーベリーは、口に入れるとピチュツとつぶれ、甘酸っぱい味が口いっぱい広がる。私はすっかり夢中になって、子供に戻ったように手を交互に動かしながら食べた。口や唇や舌にこんな色が付くこともはじめで知った。ハンスとお歯黒ならぬお歯紫になった歯をニツと出したり、舌をベーツと見せたりして、笑い合った。豊かな自然の中とても豊かな時間だった。フィンランドの人たちは、この自然を自分だけのものにならない。自然の恵みも、このような時間も一人ひとり大切にみんな守っているように感じた。

●森にお絵かき

さて、どれがブルーベリーかがわかるようになった私は、ちよつとした小道にもたくさんその紫の姿があることを知った。職場と住んでいた場所は歩いてほんの2、3分ほどの距離だったが、私はあえて森の小道を通り抜け、ぐるぐる寄り道をしながら、毎日宝物を探すようにして歩いた。木の陰からムーミンがクスクス笑って見ているかもしれない。誰もいないはずなのに、小道を歩きながら私は

何度かふつと振り返ったりもしたものだ。

ある日、そんな森の小道で、とても素敵なものを見つけた。それは、松ぼっくりや木の葉や小枝で描かれた「小さな絵」だった。大地をキャンバスにして、木の実で絵が描かれているのだ。数歩進むとまた絵があった。よく見るとあちこちに絵があった。そういえば昨日、小学校1・2年生くらいの子供たちがいたなと思い出した。これら絵はきつとその子たちが描いたのだろう。

フィンランドの子供は小道の中で、こんなふうにして遊ぶのかと思った。この国で営まれている教育について思いを馳せ、その日は地上の「小さな芸術」を鑑賞しながら小道を歩いた。

* * * * *

私はフィンランドで心がとても開放された。ありのままを受け止めてもらえる感覚があった。押し付けられることも、我が物にされることも、スペースを侵されることもなく、互いが認め合い、尊重されて、その上に関係が成り立っていた。それは自然の中でも、親子でも、人間関係でも同じだった。

ここで暮らした経験は、今の自分にとっても大きく影響している。森の中で宝物を見つけるようにして赤や紫のベリーを探し歩いたが、実は私が一番見つけたかったものは、自分自身の姿だったのかもしれない。そして、私はその実を見つけ、持ち帰り、今も大切に育てているところなのである。

友人のサマーコテージの庭で。
太陽がキラキラしたとても気持ちのよい午後、みんなで食事

かごに採れたきのこ



●あなたの「とっておきの北方圏」をお寄せ下さい。
採用の場合は原稿料を進呈します。原稿はお返し致しませんのでご了承下さい。